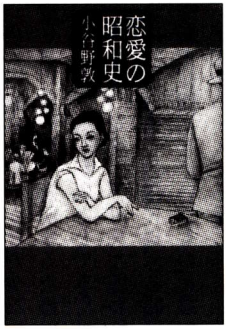
小谷野敦著『恋愛の昭和史』

（文藝春秋・二〇〇五年三月）

濱田　智崇



本書は、『文學界』に二〇〇三年二月から一年半にわたって連載された「昭和恋愛思想史」を一冊にまとめたものである。私はこれまで小谷野の著書は、話題となった『もてない男――恋愛論を超えて』（ちくま新書一九九九年）とその続編『帰ってきたもてない男――女性嫌悪を超えて』（同二〇〇五年）を読んだのみであった。そして大胆なことを書く人だと面白がっていたのであるが、今回本書と『男であることの困難――恋愛・日本・ジェンダー』（新曜社一九九七年）を並行して読み、小谷野が（大変失礼ながら）「男性に関して真剣に研究している人」であることを初めて実感した次第である。

本書は連載一回分を一章とした一八章からなる。明治三〇年代の「家庭小説」と呼ばれるジャンルのものから始まり、戦後の『君の名は』の時代を経て、現在に至るまでの文学作品に描かれた恋愛・結婚のありようと、それを取り巻く時代背景をこと細かに検証している。

本書には数多くの文学作品が登場する。そのすべてを一読するだけでもかなりの労力であろうし、私はこれらの一部しか読んだことがない。しかし、自分がかつて読んだことがある作品に関する記述を興味深く読み進めることができるのはもちろん、読んだことがない作品についてもある程度理解できるように書かれている。本書を読むうち、かつて読んだ作品をもう一度手に取ってみよう、あるいは読んでいない作品も一度手に取りたいと思わされる。

実は私は、それとは全く意識せずに性的な内容を含んだ小説を読む小学生としての過去を持っている。なぜ小学三年生にして田山花袋を愛読し、『蒲団』の最後の臭いをかぐシーンを自分で勝手に映像化したものが未だに頭にこびりついているのか、今考えてみると不思議である。私にとっての田山花袋は極端な例だとしても、かつて何気なく読んだ作品の背景を、読者それぞれの思いを持って発見できるのは、本書を読む楽しみのひとつであろう。

小谷野自身もあとがきで触れているとおり、本書は、客観的な分析であると同時に、小谷野独自の視点で語られたものでもある。小谷野は名だたる「文豪」も含め、自分がとりあげる作品の作者から、その作者がこれまで一般に得てきた評価、地位、名誉といったものを一切取り払って、一人の人間として性をどう生きたかに焦点づけて論じている。小谷野の論を読む時に感じる一種の痛快さはそのあたりに起因すると思われるし、その

意味で「客観的」と言える。ただそれは同時に紛れもなく「もてない男」小谷野の視点であり、その意味ではアクが強く、偏っているとも言える。

小谷野は『男であることの困難――恋愛・日本・ジェンダー』の中で、「男性学」では最も著名と思われる伊藤公夫を「結婚している男しか相手にしていない」故に「悪質な差別」と批判している。伊藤の流れをくむメンズムーブメントに、私自身参加してきた。それでも小谷野の伊藤批判に共感する部分があるのは、一九九〇年代以降、男性をめぐる問題が「妻との関係」を軸に、中年期の男性によって主に論じられてきたきらいがあり、より若い世代の「恋愛」「結婚」についてきちんと男性の立場から論じたものがまだ少ないからであろう。今後、男性を取り巻く諸問題を解明するためには、九〇年代から現在に至るジェンダー論が対象としてきた世代よりも、より若い世代に関する検証、考察が不可欠と思われる。小谷野の論は、ちくま新書の二冊は若干過激に過ぎる感はあるものの、こうした切り口を新たに開拓していくものと思われた。今後も注目していきたい研究者の一人である。

（はまだ　ともたか・臨床心理学）